か？　その左手の道は？　樹木の種類は？　横に7月の白い花が咲いていただろうと言われてみると、実に、眼は、何も見ていなかったと思い、では、毎日、見ていたはずの、あの風景は、いったい何だったのかとガックリするではないか。眼とはそういうものなのだ。

そこまで考えたX氏は、では、なぜ自分が眼を必要とするまでに、左手に白い繃帯をまいた人を欲するのかがわからないと思った。

最後に、X氏は、こう考えた。

死期が近いと知った象たちは、お互いの眼の色にそれを認め合って、叫び声をあげ、声の色にそれをあらわし、樹木を踏み倒し、沼や川を渡り、草原を横切り、森林をくぐりぬけ、ただひたすら、死が死に重なる地点にむかって猛烈に突進する。最後の生命の一滴までふりしぼって、見知らぬ原野を、荒々しく静かに、地響きをたてて、あらゆる障害物をものともせず、行進する。なぜ、その場所は約束された土地なのだろうか。そこが、死が死に重なる場所だと、どうして、象たちは知っているのだろうか。そこは、象たちには、決められた、必要な場所なのだ。

象たちの眼には、未知のその場所が見えているのだ。眼は、見るものだけを見てしまう力だとしても、眼の限度をこえたところに、もうひとつの眼があるのだ。その象たちの使う力を、予知・感応と呼んでもよい。X氏は、その力を、その眼を、人間に適用してみる。傷とはいったい何だろう。傷は傷に感応する。白い繃帯をした左手は、お互いに呼びあっている。手には手の声がある。

傷ついた手は、象たちのように、鋭く、感応の信号を送る。元気な象や元気な手にはとどかない、ひとつの記号だ。

そこまで考えて、X氏の1日は終った。

4

日曜日だ。特別な日ではない。昨日と同じ1日だが、24時間、自分のためにだけ生きられる時間があるという一点がちがっている。今日も、長雨が降り続いていて、7月の青空はない。もちろん、ビッグ・バンの風は吹き続けている。宇宙で、唯一、最大の音楽だ。X氏の耳にはいつも、その音楽が聞こえている。雨の音のなかに、風の中に、それらの彼方に、音もなく、ビッグ・バンの風が吹いている。永遠に吹く風だ。その風に触れるために、月曜の朝から土曜日の夜まで、耳の底に溜った音や声を解き放たなければならない。棘となって耳に刺さった無数の声たちを墓場まで送る作業が必要だ。耳朶にやわらかくまといつく声も、耳の表面で浮遊している声も、すでに、記憶の底に沈んでしまった声も、あらゆる声から自由になって、朝がそのまま朝に重なる位置で、ビッグ・バンの風の音を聞くのだ。それは、向う側から到来する。幸か不幸か、雨が降り続いているために、窓の外には、いつもの日曜日の賑わいがない。遠出をする車の音、野球やサッカーに出かける子供たちの声、ゴルフにむかうざわめき、朝の声は、長い間、死んだままだ。